

地球を学び、未来をつくる！

第二回 開発教育／国際理解教育コンクール

実践授業例部門 「生きる力」を育てる国際理解教育

宮城県小牛田農林高等学校 教諭 石森 広美

I. はじめに

私たちは様々な国と何らかのつながりがあり、目に見えないところでも、確実に関わっている。「国際理解教育」というと、「異文化理解教育」や「国際交流」が重視される傾向があるが、それだけではない。むしろ、自分のことだけでなく、同じ時代に生きる他の国のことも知ろうとする気持ちを育てたり、平和の心を築いたり、色々な文化や価値観にふれることによって視野を広げたり、自分自身を見つめたり、生き方を考えたり、共通の課題に取り組もうとする姿勢を育てたりする、「生き方教育」「心の教育」がこれからは大切だと私は考えている。

国際理解教育の包括する分野(例)

異文化理解、多文化共生、グローバル・イシュー(地球規模的課題)・環境問題・平和教育
自国理解・自分理解・自己アイデンティティ・セルフエスティーム(自己肯定感)
国際協力、ボランティア活動・社会貢献の姿勢、相互依存・他者との関係
協力・協調の精神、「役立ち感」、コミュニケーション・調査・交渉・発表する力

II. 継続性のある国際理解教育の段階

これからは、継続性のある未来志向型の国際理解教育が求められるのではないだろうか。それには、次のような4つの段階を経ると考える。

- ①異文化(世界)を知ることは楽しい・面白い
「なるほど」という気持ち・もっと知りたい
↓
- ②世界と自分とのつながり・関わりを知る
多様な価値観から視野が広がる、多角的見方を知る
↓
- ③自己や自国の文化を振り返る(自己理解)
自分の生活や生き方を客観的にみつめる
↓
- ④自分や世界をより意識し、主体的に生きる方向へ
自分の今すべきこと、目標などを自覚する

III. 「生きる力」「心の教育」分野での開発教育／国際理解教育の可能性

いろいろなことに気づき、豊かな学びを得るためには、他国と比較して、自分の置かれた状況などを客観的に見つめさせる必要がある。自分と異なった文化や伝統を持つ人々から、新たな視点や価値観を知り、人生の幅を広げる。そして、他人を思いやる心や感動する豊かな感性、たくましく生きる力を育てることにつながっていくと考える。

その意味で、開発途上国からの学びは大きい。

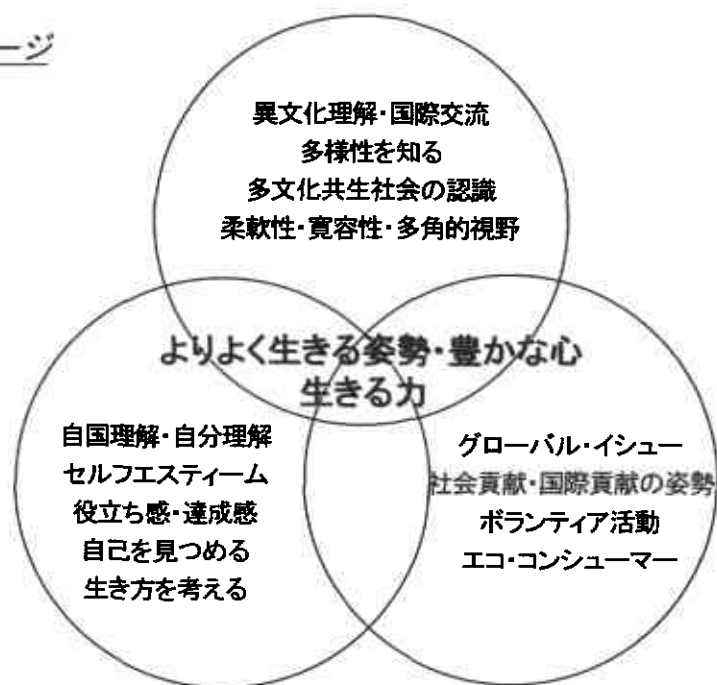
- ・「豊かさ」と「幸せ」の意味
- ・「生きる」ということ、「命」や「死」の教育
- ・「夢」や「目標」を持つこと、人生を見つめる機会
- ・自己肯定感(セルフエスティーム)、自己の存在意義
- ・家庭の和、家族関係のあり方、人づきあい
- ・感謝の気持ち、生への喜び、今を大切に思う気持ち
- ・自己アイデンティティー、国や地域、家族への愛着
- ・他者との共生、異なったものへの寛容な心、価値観の多様性の理解、柔軟性、豊かな感性、他者への思いやりの心
- ・社会貢献の精神

また、一連の活動で問題意識が高くなった生徒は、主体的に学び、行動を始められるようになる。ひいては、自分で課題を見つけ、考え、主体的に行動し、問題解決する能力など、下記の力も身に付いていくと考える。

- ・課題を見つけて、学び考える力
- ・問題意識、問題解決能力、多角的・多面的視野の育成
- ・「学び」の意味、手段、生涯にわたって通用する学び(生涯学習)
- ・情報収集力、発表する力、協力する力、コミュニケーション能力、表現力

IV. 実践の分野と観点

国際理解イメージ



実践の目的

世界との相互依存で成り立つ私たちの暮らしを考えたときはもちろんだが、この地球という一つの舞台上、様々な文化や習慣を持った民族が共存していく上で、相手を理解し、ともに学び合い、協力し合っていく国際協調の精神を養うことは極めて重要である。世界の平和のためにも、そして自らが心豊かに人生を歩む上でも、世界から学ぶ意義は大きい。

約4ヶ月間、「JICA 教師海外研修」(モンゴル)の素材を活かした授業展開を行った。

具体的な内容としては、主に次のようなものである。

- ・異文化やモンゴル理解と同時に、自国への理解とセルフエスティーム（自己肯定感）も深める。
- ・モンゴル人の大切にしている考えなどから、私たちが学ぶべきことは何かを問いかける。
- ・遊牧民による羊の解体を通して、命の尊さや命をいただいて生きていることの重みを理解させる。余すところなく全て利用する遊牧民の生き方を通して命のリレーの意味を考える。
- ・多文化共生社会に生きているということ。文化や風習の異なった人々が共存する。互いの違いを認め合って、共生していくことの必要性。また、多角的な視点を持つことの大切さを伝える。
- ・日本の国際協力の姿（ODA や JICA の役割、技術協力）、専門家や協力隊・SVなどの活躍する日本人の生き様を伝え、日本での私たちの平和と安全な暮らしが、そのような人々の努力で守られている側面も理解させる。また、自分たちが将来できることも考えさせる。
- ・途上国への理解と関心、問題意識を高める。

異文化・国際協力・多様性を知る（異文化理解・国際理解）→発見・気づき→自己・自文化理解→振り返り→学び→よりよく生きる姿勢

「モンゴル」を通し、生徒の生き方や内面に響かせる。最終的な狙いは、世界とともに暮らす仲間には様々な民族・文化があることを認識させ、異文化を受け入れる寛容さと広い心、相手を理解しようとする柔軟さを養うこと。そして、自国を理解し、他国にも目を向け、グローバルな視野で活躍できる人を育成することにある。

実践分野

- ①担当教科（英語、産業社会と人間、LHR、総合学習など）
- ②関連する他教科（世界史、地理、生物、畜産、家庭科）

実践の観点

- ①異文化や多様性の認識・柔軟さと寛容性
- ②自分や自国を理解し好きになる（セルフエスティーム）
- ③問題意識の喚起
- ④グローバルな視野で活躍できる人材の育成
- ⑤それぞれの生き方や内面に響かせる・「生きる力」を育む

V. 担当教科での実践「モンゴルからの学び」

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1時限目：導入・興味喚起。モンゴルってどんな国？ ねらい： 興味を引き出しイメージを膨らます。（英語活動）	1) 国当てゲーム：訪問国（モンゴル）に関するものを提示して、訪問国名を当てさせる。 2) イメージ調査：モンゴルのイメージをグループで話し合い、9つに絞り、ランキングする。	1) モンゴルで収集したCD、新聞、写真、通貨、絵はがきなど。
2～3時限目：文化を知る。 ねらい： 芽生えた興味関心を伸ばし、楽しさを与える。 （英語コミュニケーション活動・Team Teaching）	1) Original Show & Tell：モンゴルで入手した面白いものをボックスに入れておき、順番に見せ、それが何であるか英語で答えさせる。2) ある程度意見が出たところで、それが何でどう使われるのか説明をする。3) モンゴルの地図を提示し、地理的特徴や気候などを説明する。	1) 2) 現地で購入した物 岩塩、アーロール、ミニチュアゲル、遊牧民の骨のおもちゃ等 3) モンゴルの世界地図
4時限目：異文化理解・体感。 ねらい： 概要を「知る」のまとめとして、体全体で文化を感じる。	1) モンゴルのお菓子・岩塩を賞味する（味覚） 2) 民族音楽の鑑賞（聴覚） 3) 遊牧民のチーズを食べる（嗅覚・味覚） 4) 民族衣装を見る、触れる（視覚他）	現地で調達したもの 音楽CD、お菓子、チーズ、民族衣装 他
5時間目：モンゴル語にふれよう。 ねらい： 英語以外の外国語にふれ、視野を広げる。	CDを流し、モンゴル語の響きを鑑賞させる。 その後、基本的な挨拶用語を黒板に書き、生徒に発音させる。	モンゴル語が収録されたCD

6～7時限目：多面性・多角的視野。 ねらい：全てに多面性があり、多角的視野を持つことの重要性に気づかせる。	1) モンゴルの全く異なる風景の写真を複数用意し、生徒に提示。そこから何が分かるか考えさせる。2) 都市と地方の違い・発展と伝統などについて。3) モンゴル日本センター所長の話（異なる二つの国）。	モンゴルで撮影した写真
8時限目：世界の多様性 ねらい：フォトランゲージで多文化共生社会を認識する。	グループ活動。国毎に5枚の写真を時間差で渡し、そこから読みとれることを話し合う。最後に、国毎の資料を配付。振り返り、新たな認識や情報を得る。	JICA フォトランゲージキット
9～12時限目：モンゴル遊牧民からの学び。ねらい：遊牧民の生き方から私たちが学ぶべきものを問いかける。	1) 突然の訪問客を受け入れる遊牧民のおもてなしについて 2) ゲルという居住空間（家族の絆、生きる上で必要な物とは、生きる知恵など） 3) 自然との共存（自然の癒し、生きる力、生活の工夫）	現地撮影したビデオ・写真 ゲルを紹介した本 「たくさんのふしぎ」
13時限目：命の尊さ・命のリレー。 ねらい：羊の解体を通し、命を受け継ぐことやその重みを理解し、セルフエスティームを高める。	遊牧民による羊の解体から調理まで一連の映像を見せ、私達が他の生命の上に生きていることを実感させる。遊牧民はその家畜の全てを無駄にせず衣食住にあてるとも説明。自分たちの命の尊さを再確認させる。	現地撮影したビデオ
14時限目：大切なもの。 ねらい：私たちが生きていく上で大切なものを振り返る。	1) 自分にとって何が大切なか、各自紙に書かせる。 2) モンゴル人のコメント（民族の誇り、母のおしっこは永遠の水、家族が最高の宝・・）を紹介する。	モンゴルで聞き集めた話
15時限目：ネルグイ氏の生き方。 ねらい：様々な事に頑張る彼の生き方から学ぶものを問いかける。	通訳のネルグイ氏と撮影した写真を提示し、彼の生き方を伝える。（貧しい家庭に生まれるが、ネルグイ基金により日本留学が実現。帰国後、活躍する一方、植林活動なども行う。）	現地で撮影した写真
16～17時限目：国際協力の現場。ねらい：世界で活躍するすばらしさと可能性、国際協力の意義を知る。	1) モンゴルで視察した国際協力現場を紹介・国際協力の意義にふれる。 2) 現地で汗を流す協力隊員・専門家・SVの方々の活躍や生き方を学ぶ。	現地で撮影した写真・ビデオ 現地で配布された資料 JICA ホームページ等
18～20時限目：まとめ。 ねらい：モンゴルからの学びをまとめ、興味を持った点を深める。	「モンゴルからの学び」についての自らが執筆した新聞記事を読ませ、各自まとめさせる。 また、特に深めたい部分について調べ学習をする。	自分が執筆した新聞記事、 モンゴル航空機関誌、ガイドブック、図書資料、インターネットなど

授業の内容と展開

【1時限目：「モンゴルってどんな国？」（導入・興味関心の喚起）】

①ある国を当てよう。4～5人のグループを作る。

最初に音楽を聴かせて、自由にイメージを膨らませる。グループ 毎に思いついた国名をどんどん挙げる。次のヒントとして、現地の新聞、お金、絵はがきなどを見せ、さらに考えさせる。生徒達は、英語の辞書の裏表紙にある世界地図を見ながら、楽しそうに取り組んでいた。

出た国：China, Russia, Kenya, Nepal, Egypt, Myanmar, North Korea, Thailand, and *Mongolia*

②イメージ

次に、モンゴルときいて思いつくものを、グループで出し合い、9つに絞る。9枚のカードをその度合いに応じてランキングして並べ、グループ毎に発表する。英語で行うことを原則とするが、「遊牧民」など、難しい単語は教師がサポートする。（写真1、2）

挙げたもの：朝青龍・相撲・遊牧民・馬・らくだ・草原・組立式（移動式）の家・ゲル・民族衣装・羊・牛・砂漠・目がいい・強い・・・・・・・・

意見を交換しながら、イメージを出し合う過程で興味が引き出された。また、グループ活動を通して協力することやいろいろな考えにふれることも、達成できたと考える。生徒達は、意外にモンゴルについて知識を持っており、食いつきもよかった。



(写真1)



(写真2)

【2～3時限目：Original Show & Tell（文化を知る。興味関心を伸ばし、楽しさを与える）】

①モンゴルで購入した面白いもの（岩塩、アーロール、ミニチュアゲル、遊牧民の骨のおもちゃ等）をボックスに入れておき、順番に見せる。それが何であるか想像させ、グループ内で話し合い、挙手して英語で答えさせる。ある程度意見が出たらそれが何で、どう使われるのか説明をする。

生徒の想像例（遊牧民の骨のおもちゃ「シャガイ」について）

これは何？→ 羊、らくだ、馬、山羊、牛のつめ、歯・・・という意見の後、「骨」。

骨の用途は？→漢方薬、楽器、お守り、ゲーム（投げて遊ぶ）・・・という意見の後、「おはじき」。

②モンゴルで買った地図を提示し、地理的特徴や気候などについて説明する。

生徒達は、「知る」喜びを感じたようだ。盛り上がっていた。「楽しかった！」「モンゴルに興味を持った」「いつか行ってみたい」との声が多く聞かれた。異文化に興味を持たせるという観点では、成功したと考える。(写真3、4、5)



(写真3)



(写真4)



(写真5)

異文化は新鮮な驚きをもたらす
(写真3,4,5)

【4時限目：異文化理解・体感（「知る」のまとめとして、体全体で文化を感じる）】（写真6、7）

- ①モンゴルのお菓子・岩塩を賞味する（味覚）
- ②民族音楽の鑑賞（聴覚）
- ③遊牧民のチーズ【アーロール】を食べる（嗅覚・味覚）
- ④民族衣装【デール】を見る、触れる（視覚他）

生徒の感想：

- * 普段の授業では学べないことがたくさん学べて面白かった。同じアジアの国でも食べ物や生活習慣が大きく違うことを改めて感じた。
- * モンゴルの人は自分たちの伝統を大切にしていると思った。
- * 住む人々の生活、文化が伝わってきた。これほどまで行ってみたいと思った国は初めて。
- * 遊牧民のチーズを食べたり、ホーミーという素晴らしい歌を聴いたりして、興味を持った。
- * 私は相撲のインターハイでモンゴル人と戦い、モンゴル相撲で培った力や気力を全身で知り、とてもいい勉強になった。授業でも、興味が深まった。



（写真6）



（写真7）

【5時間目：モンゴル語にふれよう（英語以外の外国語に視野を広げさせる）】

CDを聞いて、基本的なあいさつをしてみる。様々な外国語にふれる機会とする。

こんにちは(センバイノー) ・ さようなら(ハヤルタイ) ・ ありがとう(ハヤルレー) ・ おいしい(アンプタイ)
すみません(オーチャライ) ・ だいじょうぶ(ズゲール ズゲール) ・ 素晴らしい(ガイハムシタイ)

【6～7時限目：多面性・多角的視野（全てに多面性があり多角的視野を持つことの重要性に気づかせる）】

①モンゴルの全く異なる風景の写真を複数用意し（資料1スライド）、モニターに写して次々と生徒に提示。そこから何が分かるか考えさせる。

提示写真：「首都ウランバートル中心地のきれいなオフィスビル」「ウランバートル郊外の雑然としたゲル集落」「ウランバートル周辺の産業廃棄物処理場」「草原（地方）へ向かう途中の一本道」「草原に点在する遊牧民のゲル」「町の立派な学校」「ソム（村）の学校」「馬に乗った遊牧民」

- ・ 首都のオフィスビル→「きれい」「日本みたい」「どこの国にもありそう」「その辺の景色みたい」・・・
- ・ ゴミ処理場→「ごみの中に人がいる！」「貧しい国」「目を背ける」・・・
- ・ 草原→「いいなあ」「行きたい」「気持ちよさそう」「大自然」・・・

さまざまな感想と反応が出る。どれも「モンゴル」の一側面であること。

②モンゴル日本センターの所長の話を出し、都市と地方の相違と多面性についてふれる。

モンゴルには異なる二つの国がある。

「ウランバートル国」・・・ニューヨークよりも治安が悪く危険。夜の一人歩きなど厳禁。

「モンゴル国」・・・世界一安全。草原のどこにテントを張っても翌日何事もなく安全に朝を迎えられる。

ウランバートル・・・開発のまっただ中にある首都。建設ラッシュと発展の波と首都特有の景観。途上

国の都市特有の混沌・雑然とした雰囲気が漂う。

草原・・“何もないが、全てがある”。モンゴルが世界に誇れる形のない財産。息づく遊牧民の文化。

「ウランバートルは発展してもいいけど、草原はあのまま変わらないで欲しいです」 by ネルグイさん

③まとめ：どんなことも一面だけで判断せず、多角的にとらえる視野を持つことが重要。

【8時限目：「フォトランゲージ」から知る世界の多様性（多文化共生社会を認識する）】

JICA フォトランゲージキットを使用しグループ活動。写真から情報を読みとる面白さを味わいながら異文化にふれる。最後に資料を見て振り返り、その国に親しみをもち、新たな認識や情報を得る。



(写真8)

①1クラスを7グループに分かれ（1グループ5～6人）、一人記録係を割り当てる。

②各グループに同じ国の写真1枚ずつ時間差をつけて配る。映っているものから読みとり、「分かったこと」「面白いと思ったこと」「疑問に感じたこと」等を自由に挙げさせる。国名は言わない。

③5枚全部を読みとったら、国名を考えさせる。

④教師はその国のデータや地図、写真の解説表をグループに配布する。

⑤グループで話し合いながら、振り返り、学びの整理をする。

それぞれがさまざまな発見をし、多文化共生社会を認識したり、同じ国の多面性に気づいたりできた。（写真8、9）



(写真9)

【9～12時限目：モンゴル遊牧民からの学び（遊牧民の生き方から学ぶべきものを問いかける）】

（資料1 スライド）

①突然の訪問客を受け入れる遊牧民のおもてなしについて

突然の訪問を快く受け入れ、馬乳酒でもてなす。道を聞いて中に入らず帰るのはむしろ失礼。

写真とビデオを見せながら、私たちの訪問時の様子を伝える。

②ゲルという居住空間（家族の絆、生きる上で必要な物とは、生きる知恵など）について

「ゲル」という移動式テント住居の造りをカラー本や写真で説明。

「みなさんは、家に自分の部屋がありますか？」→「当然！！」という反応。

「家に一部屋しかなくて、ずっと親兄弟と同じ空間にいたら？」→「イヤ」「思春期はつらいよね・・」

「モンゴルの子供たちは一つの空間で家族みんなが過ごします。家族の一員として家事もしっかり手伝います。どんな意味があるのか？」→「親の背中を見て育つ」「言葉を越えたメッセージ」

「家族の絆って、どうやってできていくんだろう？」「今の日本で、家族の絆はどうだろう」

③自然との共存（自然の癒し、生きる力、生活の工夫）

「出身地はどこ？」の質問に、通訳ネルグイさんから「草原です」との答え（生徒からは笑い）。

モンゴルでは出身地を地理で3つに大別→「ウランバートル」「草原」「砂漠」

厳しい自然。激しい寒暖の差。草原では真夏でも朝晩は0度まで冷え込む。冬は-30度。

360度見渡す限りの草原、満天の星。大自然の中に身を置いて感じたこと（生きる喜び・感謝の気持ち・）。癒し。研ぎ澄まされた感性。「草原に来るとモンゴル人で良かったと思う」（ネルグイ氏）

【13時限目：命の尊さ・命のリレー】（資料1 スライド）

（羊の解体を通し、命を受け継ぐことや生命の重みを理解し、セルフエスティームを高める）

遊牧民による羊の解体から調理まで一連の映像を見せ、私達が他の生命の上に生きていることを実感させる。遊牧民はその家畜の全てを無駄にせず、衣食住にあてることも理解させる。自分たちの命の尊さを再確認させる。

遊牧民による羊の解体。羊は鳴き声一つ出さず、あたかも天命のように身を任せているようだ。

「羊が私たちに命をくれるんです。私たちは命をもらい、受け継いで未来に子供たちを残していく。だから、可哀想だとは思わないで下さい。」（ネルグイさん）

男性が羊を仰向けにして押さえ込み、胸元を切り裂く。切り口から手を入れてのど元を絞める。息の根を止められた羊はうなだれ、顔を上に向ける。目の前で一つの命が天に昇る。

「羊が、空を見て喜んでいきます。」（ネルグイさん）

ナイフ一本で手際よく内臓を取り出す。大地には、血の一滴も流さない。父と息子の共同作業は、言葉もなく黙々と進む。肉はもちろん、骨や頭、毛、皮、そして糞さえも、無駄なく利用する。命をいただき、家畜で衣食住を満たす。そこに遊牧民の「豊かさ」があると実感した。生命の根元を見た気がする。数時間後には、夕食としてその肉の蒸し焼き、内臓、腸詰めになった血が出される。感謝と共に特別な思いでいただく。

最初は、気持ち悪がっていた生徒達も、ビデオを見て話を聞いた後では、「見て良かった」と言ってくれた。「命の尊さが分かった」「もっと感謝して食べたい」などの感想が聞かれた。

【14時限目：大切なもの（私たちが生きていく上で大切なものは何か振り返る）】

①自分にとって何が大切なか、各自紙に書かせる。

②モンゴル人にとって大切なものは何か。現地で聞いた話や言い伝えなどを通し、民族の誇り、家族愛、自然への畏敬などについて考えさせる。

あらためて、各自が大切にしているもの、大切にしたいものを振り返るきっかけになったようだ。

【15時限目：ネルグイ氏の生き方（様々な事に頑張る彼の生き方から学ぶものを問いかける）】

日本に留学して通訳として活躍するネルグイ氏の人生を紹介し、彼の生き方を伝える。

ネルグイさんが映っている写真を数枚用意し見せる。私（教師）とネルグイさんがデール（民族衣装）姿で腕を組み、頭を寄せ合っている写真に、生徒は盛り上がっている。（資料1）

草原生まれ、もともと裕福ではなかったが、「ネルグイ基金」で日本への留学が実現。大学を卒業後、母国で活躍する一方、未来の子供たちのために植林活動なども行う。素晴らしい日本語能力。母国の歴史や文化を熟知し、語れる素晴らしさ。夢と本人の努力の結果である。

【16～17時限目：国際協力の現場（世界で活躍するすばらしさと可能性、国際協力の意義を知る）】

国際協力の現場や国境を越えて活躍する人々の生き方を紹介し、自分の生き方や目標を見つめる。

①モンゴルの国際協力現場を紹介・国際協力の意義にふれる。ODAについて。

モンゴルにおける日本の国際協力にはどのようなものがあるか紹介。

家畜感染症診断技術改善計画・第一バス公社・第63特別学校・地方学校建設プロジェクト・湿原ワイドユースプロジェクト・初等施設整備計画学校第28中学校・モンゴル日本人材開発センター

日本の援助への期待・効果、国際協力の意義について。相互依存で成り立つ暮らし。

“モンゴル第4火力発電所の従業員が、一日休日出勤して稼いだ賃金 1,200 万トグログ (約 120 万円) を、新潟中越地震の被災者支援にと新潟県に寄付した。”というニュースも伝える。

生徒達は、モンゴルの様々な機材やバスに付けられた『ODAロゴマーク』を初めて見て、日本の援助の証を初めて視覚として確認し、感動していた様子。

②途上国で汗を流す協力隊員・専門家・SVの方々の活躍や生き方を学ぶ。

途上国で自分の技術を活かし、頑張る日本人。JICA 専門家・シニアボランティア・青年海外協力隊を紹介。60 歳を過ぎても、生き生きと活躍するその姿、若さを武器に現地に飛び込む隊員・・・。

この国際化が進む時代に、活躍の場は日本とは限らない。誰しもが、世界で自分の能力や技術を活かせるチャンスを持っている。大切なのは、情熱と勇気、そして活かすことの出来る自分の得意分野。

【18～20 時限目：まとめ（モンゴルからの学びで興味を持った点を研究、発表する。）】

①まとめと振り返りとして、自らが執筆した記事「学びの風景～モンゴルと日本～」(2004 年 10 月火曜日河北新報「教育のページ」に掲載)を読ませ、モンゴルから私たちが学ぶべきものを各自考え、まとめさせる。(添付資料 1, 2)

モンゴルから私たちが学ぶべきものを各自考え、まとめさせる。

②特に深めたい部分について調べ学習をし、まとめる。

総合学科の生徒の感想

- ・テレビ、携帯電話、車など、毎日当たり前のように使っている私達に比べ、遊牧民は生きるための知恵を活かして暮らしている。
- ・本当の豊かさの意味を考えさせられる。
- ・大自然の中で暮らすモンゴルの人たちと違い、私たちは物や機械に頼って生きている。真っ青な空や満天の星だって、見る機会はほとんどない。私たちは本当の自然を知らない気がする。
- ・一つの国をこんなに学ぶのは初めてです。興味がわき、勉強になりました。
- ・家族について考えさせられました。
- ・何度も「自分がイヤだ」と思ったことがあるが、自分も他人も大切にしていきたいと思った。
- ・モンゴルでは家族が特別なものだと感じた。日本では子供が親を殺したり、親が子を殺したり虐待したり、間違ったことがありすぎる。
- ・生きるということ、そして自然の素晴らしさを感じました。今の私たちは、生きるということを簡単に考えていると思いました。
- ・モンゴルのように暮らしなら、今の日本のような問題のある社会は考えられないと思いました。命の尊さを実感しました。
- ・普段自分たちが食べる肉も、こうやって食卓に並ぶということを考えさせられました。
- ・大自然を体いっぱいを感じたい。自然の素晴らしさ、命の大切さ、生きていることの喜びを感じたい。そうしたら、今の自分を変えられる気がする。
- ・家族や環境、体験から学ぶことは、日本では欠けている気がします。
- ・私たちの方が物に恵まれた暮らしをしているのに、多くの不満を持っているのはなぜだろう。
- ・他の生物の命の犠牲に私たちが生きている、とう事がよく理解できた。もっと感謝したい。
- ・自分の悩みがいかに贅沢か分かった。今のままでじゅうぶん幸せなのだ。

- ・同じ地球に住んでいても、環境や生活が全く違う。不自由な生活をしている人も世界にはいる。日本が嫌だと思っていたが、世界で起こっているいろいろな問題を知らなければいけないと思った。
- ・「楽しかった！！」

VI. 他教科との連携 ～畜産・世界史・地理・生物～

2年総合学科選択「世界史A」

教科書にあるモンゴル遊牧民の生活や遊牧国家についての説明に関連しての授業。(授業風景写真10)

第4章 内陸アジア世界の変遷 1. 遊牧民とオアシス民の活動 遊牧民の生活と国家

- 1) 「モンゴルでは、『衣食住』の全てを家畜が満たす」とあるので、具体的にどう満たすのかを、①ミニチュアゲル、②フェルトのブーツ、③骨(シャガイ)、④アーロール を用いて解説。
- 2) 遊牧民による羊の解体の写真を見せ、その解体方法や技術、遊牧民の文化に触れさせる。
- 3) 教科書にゲルの写真が掲載されていたので、実際のゲル訪問場面をビデオで見せる。
- 4) 「騎馬遊牧民」という用語に絡め、モンゴルで馬やラクダに乗り遊牧民の目の高さを体験し、全く視界が異なったことを伝える。
- 5) 最後に、モンゴルで買った「世界地図」を提示し、担当教師とともに、地図の特徴を説明する。

2年総合学科選択「地理A」

地理の教科書「世界の気候」に関連して、出前授業を行う。

- 1) 教科書の見開きに参考として掲載されている、世界各地のカラー写真を追って見ながら、実際に私が見聞きした経験を盛り込んで話をする。短時間の世界一周旅行の雰囲気。
- 2) 教科書の「乾燥帯の生活とその自然環境 モンゴルの草原での暮らし」を開かせ、一読させる。掲載されている写真(遊牧の様子、ゲル組立、食事風景、ゲルの内部、乳製品作り等)を詳しく解説。
- 3) 現地で購入した、ゲルのミニチュア、フェルトのブーツなどを見せる。
- 4) 教科書にある、乾燥地帯の気候、草原の自然の厳しさを体験をもとに語る。
- 5) 実際のゲル訪問時のビデオを見せ、ゲル内部の様子を映像とともに説明する。
- 6) 自然とともに生きる遊牧民の生活を理解させるため、羊の解体場面のビデオを見せながら、解説をしていく。映像は、羊解体→調理→食事の場面 まで一連を見せる。(授業風景写真11)
- 7) まとめとして、自らの新聞記事「生活が子ども鍛える」を読ませ、授業の感想を簡単に書かせる。

実践のポイントと実践の感想

教科書に書いてあることに現実味を持たせる。実物や映像を見せ、経験を語ることで、興味関心・学習意欲を引き出す。外国の文化や生活を知ることきっかけに、自国や自らをより理解し、新たな学びを通して、振り返るきっかけを与える。

目を輝かせ、真剣に聞いていたのが印象的だった。研修を効果的に活用した授業実践が出来た。

生徒の感想

- ・教科書に沿ってそれぞれの国の特徴を教えてもらって、とても分かりやすかった。実際に現地に行って見て聞いた先生の話は、興味がわき、とても楽しかったです。また教えにきて下さい。
- ・羊の解体にびっくりした。気持ち悪かったが、私達が生きていく上で必要なことなのだと考えさせられた。
- ・羊の解体がとても印象的でした。普段、動物の肉を平気で食べているのに、実際にその動物が殺されるところは見たことがありませんでした。今回、見られてよかった気がします。もっと感謝しなければ・・・
- ・生きるということ、そして自然の素晴らしさを感じました。今の私たちは、生きるということを簡単に考えていると思いました。モンゴルのように暮らしなら、今の日本のような問題のある社会は考えられないと思いました。命の尊さを実感しました。

- ・ 羊が殺されるのを見るときは、始めはイヤだなあ、と思ったが、大草原の映像を見ると、とても普通で自然なことと思えた。あれが、人間の本来の姿なのかもしれない。
- ・ 普段自分たちが食べる肉も、こうやって食卓に並ぶということを考えさせられました。
- ・ すごく楽しい授業だった。生きるというのは、ああいうことなのだ、と感じた。
- ・ 改めて、世界の国々にはたくさんの文化があるのだと思いました。自分も海外で交流をしてみたいです。

農業技術科農業科学コース 畜産専攻班 生徒3年生（男子のみ）

- 1) ねらい：専門教科として畜産を学んでいる生徒達が、家畜と密接に関わるモンゴル遊牧民の生活の様子を知ること、将来、畜産業に携わる上で参考になりうる、豊かな教養を身につける。
- 2) 導入：最初にビデオ（モンゴル遊牧民による羊の解体のシーン）を約20分見せる。見せながら、通訳の話や、自分が感じたことをまぜながら、遊牧民の家畜に対する思いを伝え、解説する。

・ 暴れたり抵抗したりしない羊・小型ナイフ一本で解体する技術・父と息子の共同作業・男性と女性の役割・命の犠牲に人間が生かされること・家畜が衣食住すべてを満たしていること

生徒は、ビデオを見ながら、自由に感想・質問を投げかける。特に、羊が自然な流れで息を引き取ったとき、毛皮を手で剥いていくとき、内臓を取り出していくときに注目していた。次第に映像に引き込まれていき、真剣な眼差しで観察し、興味深そうに見入っている生徒が多かった。

- 3) 講義：その肉が私たちの夕食になった。解体場面を見た後の夕食が特別なものであったこと、感謝しながら食することができたこと、これまでになくおいしかったこと、などを伝える。家が畜産業を営む家庭の子も何人かいたが、家畜の解体場面は誰も見たことがないという。

「こんな場面をみるのは初めてだったので、見入ってしまった。」

「ナイフ一本であんな風にきれいに皮をはいていく技術は素晴らしいと思った」

「すごい」、「美しい」・・・。

- 4) 発展：モンゴル5大家畜（羊、山羊、馬、牛、らくだ）について説明。また、頭、体の肉、内臓、血、乳、毛、骨、糞が、最終的にどう利用されるのか、彼らの生活のどの部分を支えているのかを問いかけ、生徒の考えを引き出しながら解説を加え深めていった。

頭→スープのだし、頭の骨は信仰（ガウォ）。
体の肉→調理して食べる、保存食（干し肉）にして食す。
内臓→食べる
血→小麦粉、塩、玉葱などを加えてソーセージを作って食べる
乳→チーズ、ヨーグルト、酒（20種類以上の乳製品に）
毛→防寒具、衣類、靴、ゲルの外側（フェルト）など
骨→だし、占い、おもちゃ（おぼじき）など
糞→燃料（マキより長持ちする）

家畜利用の具体例として、現地で調達した品々を見せ、アーロール（遊牧民の保存食）は食べてもらった。食した感想は、総合学科の生徒とは異なる面白いコメントが出た。（授業風景写真12）

「匂いがきつかったが、食べてみると酸味が強い。今まで食べたことのない食感と味。」

「口の中で乳の独特の味が広がり、最後に甘みが残った。」

「うちでおばあちゃんが作る酒粕に似た味」・・・。

他に、「羊1頭で何日間ぐらい家族が食べていけるのか」「モンゴルの人は野菜を食べないのか」「このアーロールはどのくらい保存がきくのか」など、農業技術科らしい質問も出た。

- 5) まとめ：「食べることは私たち人間の基本であり、私たちが生きていくためには食べなければならない。畜産を学んでいるみなさんは、その人間の基本的営みに関わっている。」

6) 生徒の感想

- * モンゴルの人と家畜の関係が何か特別な信頼でつながっていると感じた。羊は人の手によって「死」へと導かれようとしているのに、暴れもせず、まるで何かを悟ったように息をひきとった。その姿に、哀れみではない涙が出た。私たちは生きるために何かを犠牲にしている。そして自分も何かのために尽くす。それを純粋に感じ

ることの出来る授業だった。

- * モンゴルでは、人、動物、自然、それぞれが生きていくための役割をもっている、と感じた。将来、畜産に携わろうとしている私にとって、とても新鮮でよい刺激を受けることができた。

3年総合学科選択 生物ⅠA

教科書にある「人間生活を支える生物」「豚の眼球の解剖」の二点に関連させてアプローチ。

- 1) 人間生活を支える生物として、食物だけではなく、衣料や住居、エネルギーへの利用、などがあり、例として、モンゴルの遊牧民の家畜の利用方法をビデオを活用して説明。また、食物連鎖の頂点に立つ人間が、様々な生命の上に生きていることを実感させ、命が大きく輪廻していくことを理解させる。
- 2) 解体場面の映像を見ながら、その伝統的方法を知り視野を深め、また、取り出す臓器等について、生物教師が解説を加え、関心を深めさせる。
- 3) 担当教師が食肉処理場にて購入してきた豚の眼球と器具を配布。生徒は水晶体を取り出す。



(写真10)



(写真11)



(写真12)

V. 実践の感想・課題

普段から、教育のあらゆる場をとらえて、機会ある毎に、世界への意識を喚起させ、地球市民としての自覚と素地を身につけさせるよう努力している。今回は、一つの国を集め、様々な切り口で「生きる力」を育てるという観点で、国際理解教育を授業の中で実践した。

生の教材はいつでも生徒の興味関心、好奇心を刺激する。生の教材には、現地で入手したもの他に、現地の人々の含蓄ある言葉や、人との交流で得たものも含まれる。それらを最大限に活用した一連の取り組みで、生徒の視野を広げ、異文化を知ることの面白さ、世界への興味関心、問題意識を喚起することができた。

ここに記したどの活動でも、生徒たちの反応は大変良く、楽しみながら意欲的に取り組んだ。開発教育／国際理解教育は、一方的な価値の押しつけではなく、双方向性が大切だ。グループやクラスの仲間と共に考えながら、互いに学び合うプロセスの中で、多くの「気づき」「学び」があったように思う。生徒たちの今後の人生に何らかのプラスのエネルギーを与えられたら、と考えて取り組んだが、表面的な「異文化理解」を超え、それぞれの生き方や内面を見つめさせるきっかけを作ることができ、自分自身も改めて、開発教育／国際理解教育のおもしろさ、やりがいを実感することができたように感じる。私自身が、世界から、開発途上国からたくさんのことを学び、パワーをもらっている。その思いは生徒に伝わっていると確信する。

今回は、他教科の協力を得て、自分の担当以外の科目でも実践することができたが、もっともって教育活動全般に展開していきたい。個人プレーではなく学校の組織の中で、教科の枠を超え、体系的にどう位置づけ継続していくかが大きな課題である。そのためにも、海外経験の有無に関わらず、誰もが取り組めるプログラム作りを目指す必要がある。開発教育／国際理解教育が、未来志向を持ち、すべての教育を貫く大きな柱としていくにはどうしたらよいのか、今後も考えていきたい。

VI. 心がけ

- ・ 常に教材収集・情報収集（研修・機関誌などを活用）を心がける
- ・ 思いついたアイディアはすぐにメモ→教材作り
- ・ 多角的・多面的視野に立って見る。
- ・ 実践は、普段の授業の中で継続的に
- ・ 生徒が主体的に参加できるものを盛り込む
- ・ 常に研究・実践・様々な経験を積み重ねる。
- ・ 試行錯誤しながらでもやってみる→徐々に改善
- ・ 仲間とのネットワークづくり
- ・ 教師自身が国際協力の実践者となり、自らグリーン・コンシューマー（エコ・コンシューマー）、地球市民としてのモデルを示す
- ・ よい学習者であること

VII. まとめ

国際理解教育は、人間教育だと私は思う。異文化を知り、自分と異なる環境に置かれた人々に思いを馳せ、自己を客観的に見つめ、世界との関わりをより意識した生徒たちは、大きく成長し、人生に対してより前向きになる。実際、私自身がそうだったように。世界を知ることは自分を知ること。自分の生を活かし、社会に有用な人間に育って欲しいと願う。

“Think globally, act locally”

今後も模索しながら、自分のなすべき事に邁進していきたい。

資料1 授業で使ったスライド



2



3



4



5



6



8



9



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35